

『変窟蟻の世界』の世界

——一名 痴蟻神礼讚——

池田一彦

笹の家すゝめ著『変窟蟻の世界』は、明治二十三年五月四日印刷、同年同月七日出版、著者発行兼印刷人は東京府士族三枝保之、発売所は東京市浅草区松葉町八十二番地東京各書籍店とのみ奥付にあつて、あとは同著者による出版広告しか載せない、一種の私家版である。全百二十頁のボール表紙本で筆者の手元に二冊存する内、一冊は三方マーブル模様が施されてある。挿絵は大小五種、本文は総ルビである。漢字の用い様やルビの付し方に特殊性が認められ、そこに面白味も存するが、誤植も多い（特に濁点の脱落が目立つ）。自序に次のように言う。

間食は口舌の娯楽。何ぞ必しも摂生に益すると否とを間の要あらんやと宣は之胃臟に欠代のあるお方。此小説は昼寝避の茶菓子に等き物乍ら。少しは含む風教の滋養なんかと小癩な一分の虫にも五りんの魂ありと云虫に化り。文盲滅法穿た変窟蟻の世界。是魂の自由国。小人と賤者の為に嬉しき物とは清女に問たら夢と

や苔こけん。げに夢は魂の公園地。欲見物みなたい必ず見る嗚呼あやう小人其所を得たる哉。荆妻ばいあの曰聖人は得ずと。巳ママは貧賤と小人を兼備せる者則すなはち夢の問屋と云も誇言にあらねど。此売物は問屋より古ほけても虱に乗た彼曲亭翁。諸もろは亦蝶に化られた彼先生杯はは小人の領分内へ舞込で。今も世に。蝶よ虱よと賞讃もてはやされて問屋を凌ぐ。飛上とて売れた名は。依然いじかな落ぬ紙い紙のほり。さは云ど是等は眞ほんの古董物こつどう今若吾儕が渠かれを学び花の舞台ひらくに翻々めうてふと優長な蝴蝶の二の舞を行やつた所が。虱の尻尾すがりつきに追倣おしな附五大洲見物にて候と迂遠とほまはりに出掛た所で。世人の嗤笑わらひは執道どの遁れぬ白痴なれど夢は到て正直者。見覚みさのない世界は見せず。世間見ずの文盲あまぐら。文士は浮雲あぶなに近寄可らずと。高けだ尚かいぞと空言は一切排して最下とんぞこに済し込。下ひくい下にも極下く。穴に穿もぐつて洞を吹立。サア御覽ごらんジロ蟻の世界は面黒し。サア覗のぞき玉へ新奇に築た地中の樓閣。サアくと勢一杯仰向よばて呼張はば。モウ寝言かと耳の側で噂うわさ：「ハ」嚏くしよ。風を引なと山の神の御託宣。畏まつたと夜着引被ひぎて。ドラ本文の仕入に取掛らふとはテモ夢のんまを売程優長のんまな家業なは有し。

明治廿三年卯月の吉日甘茶に浮されそ、ろ言を囀て序となす者は龍宮を吹出す貝に縁のある

笹の家す、め誌

莊子や近くは曲亭馬琴を引き合あいに出しつつも、己は天高く飛ぶでなく悠長に舞うでなく、地中深く潜り込ひで「蟻の世界」を穿鑿せんさくして見ようという、これも一個の「夢」物語だ。「一分の虫にも五りんの魂あり」と云虫に化り、高尚めかせばその「魂」の異界探訪の記、ともなるであろうか。

全部で五回から成る、その第一回は「蟻院開会式喜生の野辺の演説 痴魄道に迷て砂糖管の里に入」の破題に示される通り、主人公が夢に一疋の蟻と変じて、砂糖管の里に迷い入るまでを叙する。

宵の程一降せし春雨の檐端に残す玉水の音も細く絶々になりて。(中略)唯己に向ひて座する者は一個の小さき洋燈のみ。沈黙として思廻す既往も物忘するに後を取ぬ質なれば是を葉に辿らんと。……古文庫引出して。……眼と共に精神も復古の上に世の活劇の跡を探りて何方迄もと抜渉しが長追するうち視心経は逡巡し。魄 独茫然として有し所に。何方よりか色黒々として頭大きやかに口いと剛げなる男出来て和君は道に迷ひ玉へるならん。此方へ来ませと云つゝ導かるゝに今は他に便るへき者もなければ云るゝ儘に其後に付て行。……(中略)渠は後を振向て——是は和主が常に愛する蟻ちふ虫が仙虫となりて住む所ですよ——私は此仙境内得たからお誘引申ましたよと云ながら進入——這は何事やらんとも思はず只渠の背中を嗅つゝ先関の戸も安々越たり——斯して行内に何時感化しか巳の形容は全然渠と同じ有様に成果たり是も亦一寸ハテなと思たばかり飄然飛が如く游が如く行事亦暫く——只見れば行方に高閣あり——彼が集蟻院ですと云内早其所に到り内に入て。(中略) 偕彼男を願しにはや何時の間に何所へ行たか影だに見へず——漸 譬と共に神氣も落着て来と此内の光量だん／＼親譲の鏡に写り出せり——今日は開院式にても行やらん場内何所となく初々敷晴がましよう見えたり……

「既往も物忘するに後を取ぬ質」の主人公——名は本文中にまだ見えないが、破題により「痴魄」——はまた、蟻に引かれても「這は何事やらんとも思」わず、姿形が蟻と変じても「是も亦一寸ハテなと思」つたばかりであ

る。なまじ内省も懷疑も無い（深まらない）所、『浮雲』や『舞姫』の主人公達と比べるべくもない、しかしてそれゆえ却って軽やかで好ましい。とはいへ、痴魂の名に恥ぢず、「精神」「視心経」「魄」「神氣」の用字・用語は、さながら近代的内面重視の方向に棹さすものの如くでもある、のだが――。

さて、衆議院ならぬ「集蟻院」には、これまた天皇ならぬ「蟻王」が君臨して、「吾仙境億万虫民の代表者たる汝等衆議員に告」（中略）茲に汝衆員を集へ此好時節に於てなすへき事業の計画其他仙境百般の政度を審議せしむ（中略）百般の事業虫其成功を疑はず」云々と綸言を賜い、「衆蟻」の議長が総代めかして「臣喜、謹て奉答し奉る陛下聖明の徳日月に等し。（中略）蠢々たる蛆臣叨りに虫衆の推撰を承け此公堂の一榻を占て聖明に咫尺し優渥なる聖諭を拜聴す臣等が幸栄何者か之に加へん（中略）臣喜億万の虫衆に代り謹て聖寿の萬歳を祈念し奉る」と「蟻王」の徳を称え、「衆員同音に聖寿萬々歳」を唱えて開会式は終わる。蟻王退席の後、議長による議案の朗読へと進み、「凡人類の棲息なす所に這込たる者は終身外界禁足罪に処す特に富貴權門を選んで之を爲たる者は一等を加へ仙境長夜一期以上外界放逐罪に処す」の第一項を始めとする「議案第一類 放律の部」全三項、「仙境虫衆の外界出業の区域は人類者半町以内を以て限とす」を始めとする「議案第二類 業政の部」全三項、「仙境大閼門を人類占居庭垣外に移鑿開通し之を本仙道とし旧大閼門を閉鎖し其旧道を尚北方人類家裏に通鑿し之を副仙道とすへし」を始めとする「議案第三類 巧業の部」全二項が読み上げられ、「右の外本期歳出入予算竝に前期決算報告其他諸種の事業設計細目等は朗読を略します諸君配布する書類に付て御覧なされ。亦明日は大宰相閣下が議案の説明をされる筈です」と予告が済んで、この日は先に衆議一決した通り散会となるのであった。

己は何にしる九尺二間斗りの城郭の主より茲に到て忽集議院議員と成済したる事なれば。なんだか無闇に嬉くて水溜を見てもにこ／＼絶快々々と叫び乍^な…的所もなく心の足の向に任せて行方も知ぬ夢の路哉杯と囀り散して一向浮れに浮れ行きつ…

蟻と化しても「議員」は嬉しいらしく有頂天に浮かれまくる主人公の能天氣さがまた清々しい。不景気な「免職」どころの話でないのだ。

と、「向よりヨッショ／＼と俵にしては○過る粒々立し物を擔ぎ来」たる男に「芥子粒」を「沢庵の押石」かと尋ねて冷や汗をかき破目に。「男は眼をきよろつかせて此虫は何を云なざる是は芥子粒です」這はけしかる能々見れば成程芥子なり『なあると云かけて。きまり悪さに逃出した。』文中、「なある」の言いかけは、後世、夏目漱石の『吾輩は猫である』にも採る所、思えば痴癡も苦沙弥も同じ穴の、と評したくなる無責任と軽みの所有者なのでもあった。俗にして愛嬌のある点も、この両者どこか共通する風情である。

しばらく行くと、向こうの小高い岡の辺に多くの虫が集っている。近くの芝生の上に憩うて眺めている老虫に問えば、「此所は集議院議長喜生主の撰出地氣樂の里といふ所です彼は今主が里の衆を集めて演説をしなざるべし」との答えを得る。

己は是を聞てなんぼ氣樂の里でも随分政事に冷淡な老虫も在者哉と思ひ乍…「お爺さんは演説は嫌ひかね」…「なに好です」…「夫ては一所に側へ行て聞うではないか」…「イヤ私に構はず行なされませ—喜生主の演説せらるゝ時は皆ひや／＼と云ねばならぬか年寄のひや／＼はくださらぬ故斯離れて居る也。と…「エ—此奴人否虫を馬鹿にしをるなと余斗な世話な小癩の虫迄怒てあら／＼敷—シテ和主は今好じやと云居たでは

ないか」―渠は平気な面^{かほ}で……「いやさ私は演説を見るのか好^{すき}ですよ。夫^{それ}で爰^{こゝ}から見物して居るッ！此一言で燃んとせし胸の火もチウーと消^き―テモ氣楽の里虫哉―の一語を残して心引る、演説の場所に走^{はしり}付^{つき}ぬ……」

この老虫は、本書冒頭の「虫名録」で「目幸の翁^じ士」^{と名付けられているが、痴魄との落語めいた間の抜けたやりとり（実は筋が通っている）に、痴魄の焦^じれがよく映っている。さて、痴魄が演説の場へ走り付くと、議長}

の演説は今前口上を終わり、いよいよ本文に取り掛かろうという所、「サテ」の一声が聴衆に緊張をもたらしただけについては、

此時己^{おれ}に此短くて味もない一声^{ひとこゝろ}が如何なる感じを与へたるか―是を察せよよく察せよ。若し当時己^{おれ}に對^{むか}ひ己も当日^{けふ}始めて見たる此大虫^{おほぢゅう}の虫^{むし}と成如何^{なりいかん}と問ふ者ありしならば是^{こゝろ}に答^{こた}ふる辞^{ことば}は則^{すなはち}此感情^{こゝろ}を解^とて語るべきのみ。而も能^{よく}是^{こゝろ}を解明^とせば其虫と成の一般を知るに足るべしと信せし也。

と、なにやら生硬な文体でひたすら感じ入っている趣き。誇張にしてもながしか明治における「演説」独特の雰囲気^{ふんいき}を漂^{ただよ}わせているか。

以下、「予は今諸君^{みなさん}に咄^{はな}さなければならぬ尤^{もつとも}緊要な事件が二つ在ります……」云々と約八頁にわたり喜生の演説が続くのだが、本書の特色の一つとして、引用の一字下げが文章の途中から行われる――一字下げの引用部分の独立性が若干損われる印象を与える――ということがあって、右の演説部分も「予は今諸」まで地の文と同じ組み方で「君に咄^{はな}さなければ」以下がずっと一字下げで続くのである。今日から見れば、少々奇異な感じを抱かないでもないが、明治二十三年当時、まだ文章表現上の種々の約束が固まってしまう以前の、過渡的な現象の一つと認められる。濁点の有無の不統一から用字の變化、言葉や思ひの微妙な間を示す一字分の「……」（点の数も四つ、

五つ、六つ、七つと所によってまちまちであるが）の多用やルビ使用の闊達さまで、本書表現上の特色と見做すべき点が多い（先述したように、単純な誤植と考えられるものもまた頗る多いけれども）。

さて、演説に戻つて、「緊要な事件」とは、「人類社会の変遷 則 外物の刺撃に遇て起つた何でも行ねばならぬ事業」である。「大関門移転一件」と、下層が「蓄餌大倉庫」中層が「正蟻院并に大政庁」上層が「遊仙窟」と議案で謳われていた「大塔建築一条」で、この二大工事、「必要の事業」である前者を「今度下府の議案」に、「進取的事業」である後者を「与論」に任せて行ふべきだ、と演説の主は訴えるのだが、こと「人類」に触れて「彼神言の事」に及ぶや、「一原何となく敢動め」く。それは、「彼天人の使者は開化といふ幸福の種子を齎せ来るといふ事」で、「既に快楽で成立した巢窟」である「仙境」がまた、これから「開化虫の淵叢」となるという「天の賜」に対する一種の信仰で、喜生も「吾黨員」も「神言信者」なのだと言う。（これが意味する所は、当面謎のまま、第二回で種明かしとなる運びである。）

夫は然と彼反对党は常に吾党を以て政府党だとか王家に媚るとか或は与論を蔑視するとか評しますが是は誤解から出た甚しい妄言です。吾党は決して其様な私曲を差挟む者では有ません。公正無私以て仙境の福祉と秩序を増進保持ん事を大眼目として立者です。（中略）媚のは何れにしても善事ではない！反对党は与論に媚る者では在ますまいか（此時群衆の後に忽ち蒸気釜の破裂せしかと驚く斗の聲にてノーノーと怒鳴出せし二三の壮士あり尚暴（言吐んとする勢なりしが同伴中之を制する虫あり亦多数喝采の聲は能之を圧するに足しか跡は聞へず）（中略）是は其社会に因る事で一樣には云ませんが。仮令吾々は万虫の靈とは申者の未幼稚な世界で在ますから。余り与論の云なり次第にしては。子供を我儘氣隨に育成と同じ道理で。行末何な乱暴な者に成か知ません。自由も誤解すれば我儘となる……米とかいふ人類社会では自由を利用して国を建。ぼさつとか仏とかい

ふ国では間々之を誤用して国を危急に瀕せしめた事か有ぞふです夫故古歌にも…「幸福の島自由の種を蒔」と有ます米と仏でも同じ様には行ない(聴衆ヒヤヒヤ妙説米でもブレッドでもだめたじよふの爲には割を喰べしか杯とまぜるは前の連中ならん) (一)内の文字の大きさは、地の文の文字と変わらないが、便宜上小さくしてある。以下同じ)

で、「自由」についても「事物に固有の利害はない。只使用者の巧拙に因るのみ」ということになって、喜生の演説は無事終了する。散会后、まだ「旅寓」も定めない自分に気付き「扱々世には迂濶な奴も有者哉と魂と魄が服の中で喧嘩を始めたが内輪の紛紜だけ直丸くなり。善さく良々気楽とは名が頼母しい。此里虫を便りて一夜明しの浪枕とやりませう。ドラ何様な管屋にでも漕着ん」と頼りなく野路を行く。

吾服も早此空原の兄弟分と半成たので思さま地団駄も踏めず！ 儲在べきに有ざれば吾と吾が氣を励ますに奇異者哉精神忽ち憤然となりて何の此仙境広しと云て何程の事かあん窮極か地球の底は離れじ。(中略) 傍若無虫な勇氣を振起て！ 勢込んで走る事七八丁(中略) 恰も汽車の化物とも謂へき言語同断な氣持になり…と、氣付けば「里」に立っていた。漸く「虫心地付て。エ、痴呆な目に遇しと独言つ。先何はともあれ巢に有つかんと此所彼所見巡」ったのであった。

第二回は「痴魄哀家に寄寓して前世を知 哀生意中を明して痴魄を慰む」で、痴魄がたまたま「旅寓」と定めた哀生の家で、その父子と相語る段である。「僮僕」に案内された痴生は、

先占たりと引るゝ儘に入相の窓さへ薄昏き廊下をすぎ戸も当世風ならず画きたる松の緑の茂きを見て…(中略) …程よき一室に案内し何や彼や親切しく執成つゝ先打寛ておはしませと斯叮嚀に出られては痛入ほ

ど膝も解せずしいてすゝめる褥の上……此所で若竊砲でも放たば如何せんと踵の栓を臂に廻らし堅苦しく座を占た……(相変わらず一マス当たりの「…」の「…」は四つ以上七つ——後には八つのもある——までまちまちであるが、余りに煩瑣なので、止む無く今日一般の一マス三つに統一した。ついであるが、ルビの位置も「当世風」とあるのを「当世風」という風に直してある。以下同じ)

のだったが、「廊下をすぎ戸も」の古風な掛詞や「しとね(褥)」を(江戸ッ子風に「ひとね」と訓んだカ)「褥」の洒落(?)が目を引き、また「竊砲」の一件は、明治十年代の南新二の新聞投書など思い出されて微笑ましい。「竊」の字は、『大漢和』に『集韻』を引き、「屁」に同じ、と軽うじて見出せるのみ。珍なる文字である。)

「主虫」らしき老翁と「名対面」すれば、これは「当主の父」で、「気楽の里」に「仙境内でも名望高き紳士」の「養生」について尋ねれば、ここは「砂糖菅郡砂糖舐の里」で、痴魄が演説を聴いたのは「言問が原」の「喜生」だと教えられる。「夕飯」にありつきつつ、先程老翁が差し置いていった「一二冊の雑誌と新聞二三葉」の中、「仙境時報四月十九日号外附録特配達」とあるのを見れば、「議院の珍事」の記事に驚かされた。

……這はそもいかに此紙上の数行の文字が吾精神に爆烈弾の如く。怖しい。激烈い。感動を与へ……今迄面目の為に悶た胸も……芥子粒太の膽も……何所へか消し飛され……ソウワツとして冷き汗が背筋に流るゝを覚ゆるのみ……自己なから死だのでは在まいかと疑ふ程。全虫心地もなかつたがや、散時して先精神は無事で吾に復つたが……疑団は益々胸に満……更に解べき術もあらねば。跳る神気を押鎮めつゝ、刃を握る思ひをして捨た新聞を……再び取上……厭念ながら大略を読ば……心仙府撰出議員痴氏の事に付ては世上種々の怪奇を伝……中略

記者も今は人類の変物たるを疑はず……中略或は彼は前世則人類たりし時。怠惰遊逸にして且痴果

加之しよのみならず、偏屈へんくつ高たかじて癡狂てんきやうの氣味………天帝てんてい之のを………段々だんくく段々だんくくと

甚ししきを加くわへて竟ついにに読よつゝくるに忍しのびず。唯胸ただちほを押おへて眼まなこを新紙しんしの上うへに走まらせるのみ

「思おもえば、先まづの翁おきなはかかる己おのれの身みの上うへをそれと知りつつのさり氣きない応ま對たいであつたと感謝かんしゃもされる。喜き氏の演えん說せつ中の「神言しんげん」云々も吾われが身みの上うへの事ことであつたかと今更いまさらながらに思おもひ起おこさされるのであつた。痴魄ちやくの煩悶ぼんもん。だが、たちまちに思おもひ返かへし、「實じつに精神せいしんのたゞずまひほど転うつりか變への速すみな者ものはあらず」、で、この家の「主虫あるじ」と「お客虫おきゃくちゅう」の對面たいめんとなる。痴魄ちやくの「貴下あなたは今余あなたの神魂しんこんが如何いか様な悲境ひきやうに伶さゆるか……『鬱積うんせきして明あすよしなき疑團うんがひの雲うみに掩おほへる心こころの空あかの情狀じやうざう如何いか………もふ大略おほまづはお察みしぐだされたか………余あなの爲ために先貴下まづあなたの胸襟おほねを開ひらてお示しし下さい」の問といかけに、哀生あゐせいは「痴生君ちせいくん余あなは君きみを見る事こと一見旧識いちけんきうしきの様に思おもひます余あなは實じつに痴生君ちせいくん……君きみを最信愛さいしんあいの友ともと思おもつて居ゐますネエ憂うれを共ともにするのは朋友ともの交誼かうぎでは在ありませんか」と答こたえる。以下いげ、延々えんげんと続つく哀生あゐせいの述懐じゆくわい、その主要しゆな内容ないようを繋ついで行いけは——先まづ、次つぎのようであらうか。

○哀生あゐせいは痴魄ちやくの過去かこが人間にんげんだつたと確たく信まじていること。それは憂うれえるにも驚おどくにも奇あやしむにも當あらないこと。

君きみの前世ぜんせいで在ある人ひとの世界せかいには形容けいようばかり人ひとで精神せいしんは虫むしや禽獸けいどうに化なつてる化物けぶつか夥いく多たも在ありては有ありませんか……(中略)人間にんげんと吾われ族しよとは。軀躰からだから容貌けいようまで。月つきと鼈かめ程ほど差さには相連あひ有ありませんが……これは唯ただ虫むしと人間にんげん丈だけの社會せかいを小ちさな肉眼にくがんで眺のぞみて此こゝ両者りやうしやを見比較けんした上の嘸な……(中略)彼所あそこ(太陽系たいやうけいの星々せいせい——筆者注)から眺のぞめると此地球こゝちきうが彼通螢火あつちゆうへいの様ように見みへるさうです。而しかして見みれば人間にんげんと吾われ々と軀躰からだの大おほきか差さふの色いろが白しろの黒くろの容貌けいようが醜みにくい美うのと云いのはお屁ならを捕とへて分折ぶんせつする様ような咄はなです。(中略)畢竟しつげふ人間にんげんが萬物ばんぶつの大長だいぢやうだ抔なと威張散おどろらすのは軀躰からだや容貌けいように係かはつた事ことでは有ありません彼肉躰かゝらだ中の天あまに在あて光輝ひかりを放はなち事物もの善惡ぜんあく精粗しやうそを照あして踴然おどろと明あかに分別ぶんべつす

る彼玄妙な精神を持って居るからです。夫も分別した斗で善事を撰て行はなければ靈長所か鷲鳥同様だ：夫だから彼人面獸心杯といふ人非人は純粹の禽獸より余程賤しむべき者です（中略）人面獸心は実に食ない奴だ所では在ません（中略）併此汚らはしい者に吾族の名を引合に出されなかつたは。駉軀の矮小のか倅僂となつたので：若も彼様な獸に人面蟻心杯と云名を付をつたら。飛蟻を代言に頼んでも天道さまへ名称濫用の取消と汚辱罪の告訴は厭でも為なければならぬ：亦君と私の間柄でも然らず。無二の朋友として景慕のは。君の精神が温厚で且美しいからです：

○虫民が近頃噪ぐ「神言説」の痴魄をめぐるものであるという経緯について。「其起源は一首の童謡が発端」の「流説」に過ぎなかつたものが、痴魄に関する世評は「益々深邃幽玄な境」に達したのだと言う。

此玄妙な神理は最早之を学者社会の論定に一任す外はないといふのが与論の様になりました：然所て亦学問社会の議論迄が此問題を有得へき事なりといふ方へ傾た：亦心仙府は風聞ばかりで未君が此仙境に出頭されない前に議員の内へ撰出した：政庁も亦之を認めた：先此様次第で若此お話を為のに服に思ふ程一々奇妙だ不思議だと云詞を添たら話は半分奇々妙々といふ言葉で填塞て仕舞升：（中略）世の中に這樣事が有たといふ譚は皆寓言だから（中略）斯云事が実地に生き出したは蟻の世界開闢以来君が初て、しやふから……エ：ナンデス夢ではないかとは何事です大丈夫たらん者がそんな艶史にでも有様な女々しい事を……（中略）……却説今と成て見ると彼童謡は実に予言の嚆矢でした：君の伝記を編とするには実に筆を爰に起さなければならぬ……（中略）……「埴土の神の恵に開け行有かたき事ありの世や人もまひ来穴賢」：此童謡が周く仙境に伝はると夫から人間の變生が此世界に出かけて来るといふ風説が起きました。

しかして、これが「有識社会」で熱心に議論され、これらの論説を総じて「神言論」と称えるようになったと言う。後は「神言信者」と「非難論者」の対立が生じたが、もとより「政教一致といふ政体」でもない虫の世界で「此宗教類似た問題が政事党派の一方に偏倚。吾人信党員は悉く之を信向し旧信党員には一虫も之を信ずる者はなく。論難擯斥する事水火の相容ざるが如き觀を呈」しているとのこと。先に痴魄の見た「仙境時報」その他の雑誌にも「出頭するといふ予言」の主が現れる以前から人身攻撃めいた非難論者の中傷・誹謗もかまびすき折柄、仙境虫民の多数がそれらを信じているので。

乍併是一般世虫の誤解から起つた事で、其誤解といふのは近頃一体に仙境の虫の気合が人間を認める様な傾きに成て来た。其起因はといへば人間の世界が追々射利の一方へ斗精神が走込：道德杯といふ方は褌製の動物の様に皮相ばかりで内部を見ると枯藁た木の葉：鉤屑で充満されてゐる：加之に：あはれ此聖者の形体を：外飾にする様な有様：是此世界の者が人間を厭思様になつた起因：（中略）：不可も可もない君迄悪さまにいふので。（中略）斯人間の信向の悪む時此境に出て来られたのが君の不運：

で、その「冤罪」も「天道さまの光明」で直にかわいて「今耳喧しく聞悪口の声も遠からず賞賛声と改るは確信：いざ是から学者社会の君に就ての論説の新聞上杯に顕れた所を大略お断致しませよ」——ということになる。

○「元来此仙境に政党の機関新聞共見るべき者が二つ在ます」と紹介された「非難論者」側の『仙境時報』と「吾党の大忠臣」たる『心耳新聞』の論戦のこと。以下、十頁半にわたって『心耳新聞』の論説が延々と引用されている。

「奇とは何事ぞや怪とは何物ぞや統々たる地下 苟 普通の智識を有する者。如何ぞ汝等蒙昧論者の感情の認定に信を置くぞ。汝等は常に神言説を妄誕架空の事也と放言しなから反つて其事実を非難せんとす。何ぞ自家撞着の甚しきや。(中略) 苟も社会の耳目を以て自ら任じ世虫の蒙を開くと揚言しなから。之怪談なり取らず妄説耳論するに足らずと放言し。其事実をも究めず。基因をも探らず。空裏に罵詈嘲弄し去て仕済顔するは。氣楽千萬な論者。テモ沙汰の限ならずや。(中略) 汝等は憫然にも学問社会の餓鬼道に伶へり。論者よ先腹を肥せ腹を拵へて後娑婆に出よ……(此時マは小音で些耳がといへど渠は皆で余に黙。聴けと云号令を下したのミ声も止めず) 汝先開き易き腰弁当の古書籍を開け陳腐た物は汝の常食能熟て食ば害にはならず学問社会に餓死するに優れる事万々弁当を開け……蒙を啓くは汝の難ずる所なり……(中略) 吾虫何ぞ大虫気なく愚弄散ん。而も汝が心術茲に出ず(中略) 是怪談なり空言なりと軽忽に之を放棄し去て他の一方に於ては悪鬼の如く未だ現在せざる霊虫を罵り辱しめ竟に世虫をして厭忌する所たらしむ。

当時、政党各派の大新聞の政論・論説を髣髴とする、先の喜生の「演説」口調と対をなして明治の時代の風をよく伝える、独特の生硬さを伴った「筆誅」の戯画的文体がまた妙である。右の文中、「此時マは小音で些耳がといへど」云々とあるので、この所ずつと「心耳新聞」の記事を哀生が詠み上げて、それを聴き入りながら痴魄の感想がフト茶々を入れるように丸括弧付きで放り込まれたのだとは、ウカとすると改めて気付かされる気味合ではあるのだが。

「凡各虫肉躰の上天則 脳裏に存在する所の各自が吾といひ自己といふ所の根源たる神霊と其躰軀とは恰も火と燃質物との関係と甚近似せる者あり。(中略) 精神は主。肉躰は従。(中略) 無形物主となり。固形体従となる

此点も亦近似せり」云々とさらに『心耳新聞』記事は続くが、その間には、この論説途中にただ一ヶ所、

これ其臆が絹飾に掛し粉の如く…清らかな故なり…「エコなされる様だ」「何其様事が蟻の臆は水の分子より微小ふご座升マアお聞なさいもふ終局です」…

といった滑稽本めいた痴癡と哀生のやりとりが差し挟まれていて、長い論説の連なりにちよつとした変化を盛り込んでいるのが注目される。

ア、如斯靈虫が舞込来るとは（厄介な）某の椽下で得る鯛骨ならねど実に千載の一遇…（己は服の中で曰魚に寄せ余の鯢を云ツこなし）見よ吾不蒙荒癢せる心裏の赤野を開拓する米稻は更なり。其他百般の資財を輸入し来る仙境の開港場は実に某の椽の下にあらすや…朋友遠からず人間より来らんとす楽からずや。地下の仙境是より人間の知る所とならん亦悦しからずや。（中略）…今や神言説の局を結ぶに神意を敬承せりと自信する所の一言を以てすべし。汝等妄鬼も之を聞て得道せよ。吾虫は如斯信ぜり…道徳は吾虫の心裏の財宝を保護する官府也と此一句優ならず美ならず然れども若道徳なる者が少許と雖文明に伴随する者たらしめば地下億兆の赤心の此神言に帰向する事近きに在ん…然れども吾虫は之を待がためには百年も尚遠しとせず」

「道徳は吾虫の心裏の財宝を保護する官府也」——つまりは、これが『心耳新聞』論説記者の結論なのであった。しかし、それにしても主人公の痴癡がいつの間にも自分と関係の無い所で（？）エライ者に生れ変わって、それが「人間」から見ると芥子粒程の小さな一疋の「蟻」風情と言ってしまうはそれまでだが、それでも立派な議員として、それも「神」の使いの如き重々しい者に奉られて早々に当時蟻社会のマスコミ新聞・雑誌に大々

的に取り上げられている、という設定は無茶だが荒唐無稽なりに十分な面白味があるのではなかるうか。第一回の喜生の演説ではまだピンと来ていなかった痴魄にすれば、自分の中味(価値)に覚えの無いだけ、止め処無く肥大化していく味方側のマスコミ評価との落差も大きからう、そこに言わば自己評価・自己認識と他者による評価・認識のズレという、いつの世にも普遍的な人間意識のドラマが出来してくるわけだ。己れに好意的に過熱し先行するマスコミ報道を前に、人の心はどのように反応していくものか、これまた十分「人情」の有り様を観察し得る情況がそこにある。

○哀生、痴魄と交誼を深め、蟻の世界の政治事情を語る段。哀生は痴魄に「政黨員の名簿」を示し、その現状を解説する。

……先其に出て居る虫名の内で吾党の大將分とも称すべきは。先今日君が途中で演説をお聞の。氣楽郡の喜氏。亦富根郡の智氏。心仙府中で心耳新聞主筆信氏。大博士徳氏杯です。亦反对党の重立た虫の名は。身忘郡の怒氏。金及子郡の愛氏。面白郡の楽氏。不斉郡の情氏。亦心仙府中で仙境時報の主筆才氏筆です。そこで亦大宰相忠氏の如き今の処では中立の姿ですが。其実吾党に賛成の虫です。

この後、哀生は、先刻老父に痴魄が「喜を義と間違」えた件に関し、「仁義の義は吾大王の御名」だから「尊讓して義といふ名は世虫が余り用」いないこと、「此世界は無形の幸福の輻輳する所亦此全社会は道德の学校」であること等を述べ、一方、痴魄は哀生に対し「蟻虫の義」と視分ける力の無かった不明を恥じ、「君に問たら鬱結した胸の(云も憎な人間の遊女の名似)憂雲が幾分か薄ら」いだのを謝しつつ、「余の懦弱蒙昧な痴漢で在た事は全く仙境時報に出ている通り」などと妙に神妙になったりもするのであった。もとよりその反省や、やや自

虐的な自己批判めいた言葉に一向深みは感じられないけれども…。と思えば、また一転して「天命」を全うすべき誇大な抱負を語り始める痴魄に、哀生は「蟻院に関する諸規則」——「議員は七郡一府より各四名を撰出し、内一名を首座と名付此首なる者は出では仙境の政務に参与し入ては郡府の首長たる者」である事を教えるが、痴魄は「心仙府の首座」だと言われて、内心は「(此時 忽己の鼻は鞍馬山の親父もよろしく大関門が開けても鼻か支へて外界へは出られまい這奴困つた奴)」などと直ぐ有頂天になってしまう軽薄さをまたぞろ存分に發揮するのであった。「総員は四八三十二虫」の「旧信党と人信党」の「席順」を説明して、この回は終わる。

第三回は、「徳燾の二虫痴を哀家に問ふ 忠生王命を受けて同家に到る」の巻で、痴魄が滞在している哀生の家

に、徳生という博士と先に演説した喜生の息子の喜生(混乱する様だが…)等が痴魄を訪ねてやつて来る、またその後蟻王の命を拝して使者の忠生一行が来訪する一条が描かれる。

痴魄を仙境に迎えるに当たり、「公衆の為」「此仙境の文明を啓発せん」として「神力を尽」くしたという博士の徳生は、「此上の望は君の降生を未悦しと思はない多数の虫衆を教化して渠等の精神に文運隆興の賀すべく悦ぶべきを真実に覚りし時、是と俱に拵舞せば其樂しさは如何ならん」と述べ、「天の使者」でありまた「人間の代表者」と確信される痴魄に「天と人とを敬する意を表する為に、吾党員の総代がてら推参」したのだ、と来意を告げる。

巳はハイくとは是を聞畢て潜にほつと云息を吐た、実の所博士と(おまけに)称の間に聞怖した、亦例の自製の冷たい滝でも灌せかけられるかと案じた程でもなく、先生妙に高尚事は除いていふ奴さ(知れた事は亦文)

一方、「喜生の長子先生」の喜生は、「痴魂君斯諸虫の打揃深夜に推参仕りし次第をお断致ましやふ……」云々とより詳しい今夜来訪の行きさつを語り出す。余りの突然な痴魄の降生——開院式議場の「特別席」に突如現れ着席していた、それも「今日は開院式の事て議員の外に出場の虫も多く互に見知ぬ此祝日を好機として臨場された、是も亦神慮に出しと世虫はいふ、(中略) 退散後府中誰いふとなく今日靈虫議院に降臨されたといふ風聞は俄に立ました」と。だが、「風聞」は「風聞」で必ずしも確かならず、「其所在杯は雲を捉むが如く、冥然たる噂のみ」、で、あちこち搜索し、気楽郡喜生の家へ徳生等が府中より来訪、目幸の翁の証言から砂糖昔の方と当たりをつけて、喜生老父の言伝を携え、徳生・息子の喜生一行でここに訪ね参つたのであると。

已は此二虫の口上を聞間に肚の中へ種々の事を描き出した、ハ、ア大分(以下、本書特有の一段下げになる——筆者注) 正格らしく成て来たハエ、自己も堂々たる心仙府の膝に座たとか云騒(だから究屈だ) コイツ人間社会で紙屑屋の老爺様お田爛酒の兄的と隊伍を組て居た格では調子が面白く行ない、茲そ先刻亭主の曰だ、自ら賤ふする事勿れだ……だか紺屋の寐言ではないが紳士の音色や、博織氣取を行には、先消化の悪い団子否漢語の方は、衰況だから爰元品不足も先々とした所が、大因難共可謂は時々洋語の挿語でも遣ないと一寸不合格……夫に差向蟻院杯で遣ふ奴が萬一ない共いへない、真に困難、実に当惑ハテナ……ヨシ、明日出府して……何ぼ何でも……都会だ新聞さへ在位だ……密と古本屋へお潜行……指詰英和字引と、エート名も不案内……エー吾……エート何か蟹文字の端本一二冊も散財し此資本に依て仙境十百萬虫民の眠を叩き起さふとは凄じい」

心中の思惑——「ハ、ア大分正格らしく成て来たハエ」は、己れの置かれた境遇が、最初は俄かに信じ難かつた

ところ、大きな虚構・物語が始動して、細部もどうやらいちいち尤もらしく組み上つて来た、言わば舞台整い役者が揃つたナとの感慨だろうが、飽くまで自己と自己の置かれた状況が主人公によつて客観視されているのが面白い。客観視しながら、どこか怪しい所があると少々疑つてもいる風情で、それを又、読者が客観的に眺められるという仕組みになっている。主人公の心中で或るドタバタが演じられているのを、やや優越的な気分で眺めていられるのは正に読者の特権だ。そして、客観的な態度は、自ずと滑稽・笑いを生じ、やがて硬直した心を解きほぐしも安らげもするだろう。

さて、痴魄は、徳・喜二生の厚意に謝しつつ、徳生に、自分と哀生で「骨肉の義」を結びたいので「媒介の勞」を取つて欲しいなどと言ひ出すのだが、その前、徳生に向けて痴魄が繰り出す自己像がまた妙である。

先生よ聞玉へ予が前世の齡は算る指もたゆき程額にも寄老の波寄ては返る瀉をなみみるめなみたの底：吾からと云浮む瀨もない虫の巢に同居：イエ前世も虫で殆在た訳では有ませんが。マア斯云境界に立た所から壞の世が懐しくなり。此世界を羨た様な仕ぎ：併今と成て見ればア、云境界に立たのが幸運の因。此快樂境に遊ぶ前途でした：余は亦前世では愚蒙を表する：バカ。マヌケ。アキメクラ。杯と云一種の冠詞は、悉、専有物で。余の名の上には必、此種の冠を戴きました。此冠は泪の出程難有天のお授。夫丈の効能には。高閣はイヤ知ず。是を芥溜の脇へ密と掛て逃よふと為も他人の爲めに忽。之は汝の頭へ括り付て置のだぞ。と斯云賊除保険付の冠而も是を冠らなければ不似合と云れた代物。先ザットした所でも此位な廢物でしたが今や全く反対の厚遇を受：未多数の反対者は有にもせよ此社会の有力家諸君有織家諸君が。此廢物を採て利用せんとせらる。爰に到て余は負惜みの様ですが公言します是仙境の仙境たる所以なりと。何故と申さば此世界は人

世に反し道徳正義を以利もつよりも重おとしとし是を先にするでは在ませんか。余が脳は如此馬鹿物かくのしじくで充されて居ますが。唯少許すこしばかりの徳義心とくぎしんを合あいで居ます。イヤ馬鹿を除き去れば他は悉く道徳心とくどくしんで有ます。良よや其割合は。百分の一にもせよ万分の一にもせよ。是此仙境虫衆これのの此废物はいぶつを利用せんとされる理由で有まじやう：で、前世は既に「半白おひばりの毫」だが、この仙境では生まれ変わったばかりの「赤子せきし」の自分には「慈母」に当たる哀生の「深き恩義」を忘れぬため「骨肉の義」を結びたい、となるわけだ。

それにしても、右に見られる痴魄ちぱくの自己語りはかなり強烈である。自らを「馬鹿」と心底信じ込んでいなければ、こうも説得的に自らが「馬鹿」であると力説する事は出来ない。「馬鹿」は「馬鹿」のみぞ能く是を知る——生半可せいはんかに「利口」ぶつた質の悪い「馬鹿」は（そういう連中に限って自己卑下・謙遜ぶつたポーズといった見せかけの「馬鹿」に恋々とするものだが）、今日に至るまで人界に増殖の一途を辿っていると覚しいが、真正の「馬鹿」は、なまじい小細工を弄する事もせず、権力や金に目も曇らず、弱い立場の者を虐げる事もえ為し得ない、心清らかに気高くて、いつそそれは美しくすらある、と思う。「馬鹿」の徳ということ。本書の痴魄ちぱくの如き、元を糾たづせば俗ツ氣も娑婆しやばツ氣も満々の、そんじよそこいらに遍在する手合いだけれど、神の前に跪き真摯に懺悔する求道僧もとどうそうの面持ちが備わつて来てさえないのではないか。とにかく自分がいかに「馬鹿」であるか己れの全情熱をかけて切々と訴える様は、尊く深くも神々しい。表現的には、「バカ。マヌケ。アキメクラ。杯と云一種の冠詞」をすぐ後で「賊除保険付の冠」と持つて行く所、発想に南新二等の小新聞投書などにも間々見受ける機智きしが生きている。「余が脳は如此馬鹿物で充されて居ますが。（中略）イヤ馬鹿を除き去れば他は悉く道徳心で有ます」あたりが、それこそ馬鹿々々しくて微笑ましかろう。

一方の哀生だが、痴魄の唐突な申し出に、「痴君は余を徳とする事過たり。(中略)君に尽のは仙境の為に尽のです。朋友は骨肉も同様では有ませんか。殊更義を結杯とは旧癖な事では有ませんか。我開化の先導者たる君が何でそんな古陋野蛮の擧に倣はんとするのです。」と言つて遠慮する、と、またその時、外に多くの虫の声がする。蟻王の「御使」として「宰相忠氏を正使として二三の近侍之が副となり。多くの従者引具して入来」したのであった。今夜の御使いは「公然たる者ならねば私の客と思はれよ」と言いつつ、痴魄に「君命別儀にあらず本日御辺の蟻院に降臨の事上聞に達すると…直に迎接使を差向よと下命ありしかど。御辺の所在不分明の故を以て果す事能ず。因て諸郡を探問せしめ稍やく当家に寄宿されしを知り。夜中なから下向致せしなり。」と口上を述べて、携え来つた「令書」を読み上げた。

王義外界来化の士汝痴魄に告。汝は吾王業を翼賛し仙境を開化せしめん為神人の下す恩使たり、義恭天の恩命を歎謝すると共に殊に汝に切望す。我仙境の為に能汝の使命を全せん事を。因て特に使を派して告之。且汝が邸房として一の別宮を与へ。萬般の用度其他は属せしむる所の有司をして弁給せしむべし。若夫意に充ざる者有は黙する事勿れ汝痴魄之を了せよ

宣し終つて忠生が「令書」を痴魄に授けようとするのだが、痴魄は「(茲そ一番と欲の虫を強と臍の下へ追込て) 恭しく是を拝して更に渠の手へ戻さんと」する。忠生も哀生も辞するべからずと言うので、痴魄は「外来の蛆子未だ一簣の功だもなきに。如斯恩賜を拜受せん事は。自己の良心の許ざるのみならず。他に思ふ仔細も在ば。不日奉還すべき決心なれど。散時貴論に随はん。御前然る可願上升。余も追付参宮の上優渥なる聖恩を拝謝し奉らん」とひとまずこれを受け頂くのであった。この後、忠生は「一私虫」として、哀生の他に徳生等を招き

寄せ、痴魄に「恩賜」を受領するよう説き勧めて欲しい旨頼み置き、用意された馳走を謝し、献酬を交わして一行帰途に着くのであった。

第四回は、「徳生の徳変果を老木に結ぶ 砂糖嘗の里を幸福の首途」。いつしか夜も明けて、徳生等が先に帰府すべきを時間も早く過ぎたこととて、皆諸共に出立しようということになる。忠氏の来訪で途切れた一件もあるが、徳生はなお「今忠氏の云れた事は我党の大事。若痴君が今の恩賜を拝受するを屑とせず。是を固辞せらるゝ時は差向反対党をして君を議場より退る辞柄を作しむるやも量られず。イヤ必定の事。」と危俱を表明し、哀生も同意する。そこで徳生は哀生に「先哀君よ痴君の請所を承引玉へ。」と提案する。「理屈は儲置今の痴君の境遇を思ひ。其感情を察して見玉へ。余は無理でない望みと思ふ…世虫が余を以情実なる者を。毫も知らざる者の如く云なすは難有からぬ鑑定…」云々と徳生の弁は、「吾政事上の議論を語解して私事迄情なき者の様に世虫の云が本意なきにツイ余斗な事迄」啜「て脱線するが、そこへ哀生老虫静かに立ち出て、なぜ件の哀生が痴魄の申し出を事もなげに辞そうとするのか、「其故由を…這は博士は元より他の方々も大方ご存じの我砂糖嘗の里の來歴」を話し出すのであった。

开も此仙境開關の頃…我祖先一家のみ創て爰に家居を営んで住ださふですが。此里は土質の殊に良い故か或は祖先の勉強が他虫に勝れた故でしたか。忽にして眷族増殖。家富栄安らけく世を送りしと…偕も世虫は富貴を仇と思ひし者か。其昔より吾里を忌嫌つ…在し所へ搦て加て何時でしたか時代も定かに分りませんが。外界に出かけた此里虫の一郡が。人様の砂糖にかゝり。夫を曳以て帰し所を。他虫に見認められ。其事故

庁に聞へしかば。渠等は竟に仙境外に放逐されたとか…去ぬだに世虫の忌所なりしに。斯云事が有たと云所から里の名に迄砂糖膏としも呼倣つゝ。(中略)予が祖先は王家の一族で在ましたに。是を汚た賤い虫とし疎む状は丁度人の世界に有た穢多とか云し者の様でした…。(中略)痴君よ思慮し玉へ世に大功を成んとする者は。門地とか云事も。幾許か其成功に響く物とか聞きましたに…斯忌しき吾家と縁故を結び玉はんは御身の為に好事ならず…我輩の虫の世に復とは絶てあらがねの鉄石に増心底の堅き名士が菅菰のかりにも縁故結ばんと望るゝ、恭なさ…老虫は云甲斐なくも…泪脆く…口曇ほど嬉しう在ます…

かく痴魄の申し出に遠慮する事由を述べ来つた哀生の父と子に徳生は言葉添えて、「間接には世虫の迷蒙を啓く功德あり。直接には哀家の汚名を滌べき一手段ともなる」からと上手く痴魄と哀家の縁を結ばせる、その功に代えて、更に徳生は例の「恩賜の一条」を痴魄に受領すべく理を尽して説き勧めるのであった。

肚の中極内々の処を云ば些面目ないが左あらぬ体にて…「己が剛情を通さんとてさふ諸君を煩しては濟ません…予は諸君の教に順ひ。好機会を得る迄。彼恩賜をば拜受して置と為ましやふ。儼仙境の為としならば一時の世評を厭ませふぞ…唯将来を思ひ遣て顔汗に堪ないのは斯迄諸君が予に望を属せらる…も予は美に胸に一奇策一妙計の蓄もなく。腕に蜂蛛に当るべき勇力も在らず…唯赤心に銘じ…天は必如此美俗を佑る者と信じて居るのみです…今日聞過分の声誉が明日は忽買過りの声を変じて。予に羞死を促すであらふか夫將何の厭ふ者ぞ。予は予か信ずる天理の下に立…(中略)天の命令する所を全ふせん事を期するのみです」と云畢し時…

「肚の中極内々の処を云ば些面目ないが」と相変わらず事態を客観視する目を保ちつつも、「将来を思ひ遣て」

以下の、特に「今日聞過分の声誉が明日は忽買過りの声を変じて」辺りは却って痴魄の本音と覺しく、何の中身も心当たりが無い自分が、こう人間から蟻に生まれ変わったというだけで好意的にやたらと持ち上げられるのは、少々むづ痒い、と言うか気持ち悪くもなつて来よう。そこではいっそ周囲の期待を受け容れて、エライ自分を演じ切るしか仕様も無くなつて来るでもあろうか。ただ、中身の無い者が随分有るように演じたり見せかけたりしようとして果たしてそれが、いつ、どこ迄し果せるものか、という現実的な(?)問題は残るであらうが。

さて、座にはまた酒が運び込まれ、老虫の「彼優美絶大した人の世から…好んで後生を此陔隘地下の小天地にうけ…而も此仙境中の劣等と世虫の賤む弊家と骨肉の交りを結」んだ痴魄への謝辞が述べられたりするのだが、ここらは言わば貴種流離譚の趣きすら漂っている。この「新兄弟の次第」は老虫の所謂「杓子定規」に仙境に生まれ出た順で痴魄は哀生の弟と定められ、また哀生の妻子の紹介などあつて、そこへ新聞が届けられる。

哀「今日の新聞は価千金惜らくは熟読すべき暇なし…子エ諸君先繁要な所だけ、摘んで朗読しましやふ…(中略) 仙境記元千百年四月廿日心耳新聞萬一号○公文昨日降生議員痴氏の旅寓哀家へト…先(以下、ここも原文は一字下げとなるので、引用もそれに従う——筆者注)

是は用なし○明日宮廷に於て各首座其他を召饗膳を賜はるべき旨達せられ○雑報エート先之も用なしかナンタ(中略) 偕他の虫々は本日午前一時過帰府せり全府の衆虫は本日氏を迎ふる為氣楽郡の言問が原まで蟻の観音詣り行列をなして出張し…昨夜来虫夫数百を以設立中なる大休憩所に於て氏の一行を待受る苦なり(中略) 茲に尤我党の為に賀すべきは昨日氏が散会后不知案内の自適の散歩に恰も好期せずして我党の占居する郷里に向はれたる事加之世虫の迷夢未全く覺ず僻説をなすに拘はらず夙に我仙境内出藍

の聞へある哀氏方へ奇遇せられしは是玉に光を添たる者と云べきなり（哀「ハ、ア滅法界賞賛られた併此玉は数百粒定価一銭の南京玉の類かア、ア」若氏の漫步をして反対党の郷里に進入せしと仮定し見よ其不都合如何ぞや（中略）○斯手の舞足の踏む所を覚へざる歓声嬉笑の内より眼を背面に転じ昨今反対党の状勢如何を觀察探問するに先目前府下少数反対党の如きは全く煙に巻れて咽迷し吾党の内に混入て狂奔するも笑止なり

記事は反対党の首領才氏や怒氏の動向にも及んでいたが、哀生の膝の辺りに新聞の「小附録」が落ちたのには「○本日の会議は午後三時開会の旨政庁より只今号外を以達せらる」とあり、折しも政庁より「文箱」が届き、いざ総出で五時間の道程を出立しようとするれば、またもや「府の出向の虫々の内より総代に撰れて来し者」達が訪れる。信氏の命で出迎える筈の使者が早く出過ぎて到着したのだった。

斯しつゝ暫佇立し内に門前は里虫にて市をなし何時の間に準備せしか種々の旗幟めく物杯押立つ。目も遙に一群々と成て並居たり：翁と巳は此光景を見つ、吾を忘れ。手を額の前に振つゝ：口を有ん限り開きてアナ目出度や目出度やと呼張声に里虫の歓声を喚起し。仙境十百万々歳と連呼する声に送られて砂糖嘗を立ぬ

第五回に当たる最終回の「第四回の下」は、「夢に夢見る痴魄の栄花 痴魄の末路は破衾の底」で、「再説も己等一行の虫々は。待ぬは今日は日和もよしや甘露のと舌鼓打つゝあまき砂糖嘗を跡になして浮れ行：」、と昨日喜生の演説を聞いた辺りに到着、虫々の押し立てた「旗幟」は野末に起こる「村雲」かと思紛うばかり、広い野

原は早虫の郡集で埋まっていた。「此時己は生た開帳仏の様な氣持で為らく、是神言信者講中のみにあらず、過半は変物見物なり」と此言感心に当りしならん：、「やがて十虫余りの虫が出迎えたのは、喜生の親の喜生大虫と信智両生と察せられた。喜大虫と「開化」らしく握手をする、と。

此時一原の虫一斉に彼神言の童謡を：埴土の神の恵の埴土のと声も淀なく謡ひ連て蟻の観音詣り行列をなして運動を始した訳だが狂氣じみた所が信向の厚い証拠。是から。トツ調子踊り。赤熊蟻の力持。杯とトツ調子もなく面黒イ。滑稽事。ツート上品だと云のは何だ。人世賭事ありの競争。蟻通智恵の抜穴杯と茶番狂言の外題の様な事を。ヒヤ／＼ドンとお神楽の様な。ノーノー緩歩と能の様な。イヤハヤ何とも名状すべからざる噪ぎ。謡ふあり跳るありまだ／＼種々さつたな事が有たと斯斗では看板斗見た芝居にも劣るが。兎角浮世は酒でなければ浮立ず：大休憩所で定めしご神酒頂戴：其に氣を取れ。眼は其方角に斗向て居たのだ(彼の引力)：エ、馬鹿な余り早く浮れて未信智両虫に挨拶を為なかつた。今更爲も変だ。先でも然たらふ(如例)機が後た流て仕舞と肚で決：

この所、表現の観点からすれば、「蟻の観音詣り行列」の景況を「イヤハヤ何とも名状すべからざる噪ぎ」「まだ／＼種々さつたな事が有た」と一見手を抜いた描写の片付け方でアツサリとは済まされず、自己反省的に「斯斗では看板斗見た芝居にも劣るが。」と続けざるを得ない、続けてしまう作者の氣の働きが興味深い(作者と言わず、主人公痴魄の、と言つても同じ事)。自己及び自己の生み出す表現への一貫した客観的な関わり方こそが本書の一大特徴を為すものであり、それはまた戯作的作物の、そして戯作的精神の本質でもあると考える。それにしても、右の引用部分、「眼は其方角に斗向て居たのだ」と唐突に「だ」調の言文一致体が入り込んだかのよう

な表現が含まれているのも妙だ。機を逸した感のある挨拶についても、「今更為も変だ」と思いつつ、翻つて「先でも然だらふ」と勝手に相手の心中を慮り（そして自ら感心し）、「機が後た流て仕舞」え、と打っちゃつてしまふその無責任さと言うかいい加減さも、いかにも痴魄らしくて良い。右に直ぐ続いて、

通虫あしく見へるが新聞屋ならんとの推量で馴々しく痴「信君実に恐れ入りましたナ殊に休憩所まで（酒内に在れは休憩所口出へ）お取設に相成て」……信智「サア先彼所で暫くご休息なされ」と云つゝ先に進む。

と見えるが、これまたいい加減な当て推量で馴れ馴れしく挨拶するのもさる事ながら、頭が酒で満たされているからツイ「殊に休憩所まで」と口を突いて出る所、見事に愛すべき俗人の心理を穿つていると言えよう。

「入口の上に天禄と奇しく認た変額を潜れば忽ち大楽境酒池肉林口涎の為に開事能はず。」で、休憩所内は、喜生父子、痴魄、哀生、徳生、信智両生等の宴席と化し、「個々の虫状熊各異なれど。萬体同情の和楽を茲に極め」るのであつた。この時、場外から信生に通報が入り、「頓て総の諸虫」を退出させ、「予は活た新聞となつて諸君に報通すべき大事件の通信に接したり。」と信生は「反対党の挙動」を報告し出した。反対党の大將分は昨夜身忘郡にて密議し、今朝、反対党の壮士が各郡より出府し、「聯合運動会とか大懇親会とか称」して企む所があるとのこと。そこへまた心耳社員の通信員が入り来つて、反対党が「吾党の備なきに乗して此原に大運動会を開き吾に迫つて痴氏を擒にし以て為所あらんとする者の如し」と注進する、恰もその時再び三たび場外が騒然とする——「反対党押寄来れり」と。

予は先刻より肚の中へ繰込だだ援兵に搦動され憤然として手にせる盞を哀生に贈：「兄君子が為に心を勞し玉ふ事勿れ。諸君も願はくは貴意を安んぜられよ。聞が如んば仙境の安危予の一身に係れり。此米粒大の

一身を渠に投与せば。事則平くべしと云ば智生は静に首を上：智「痴君よ血気に速る事勿れ乱撃の下に命を致すは大丈夫の取ざる所なり。(中略)君若敵と戦ふに舌を以てせんとするの意あらば予は君が先鋒たるべし」と云れて乗気になり痴「それは基より予の切望する所なり。君能渠に説て予をして渠の面前に口舌を動かすの自由を得せしめ玉は、之涯生の悦ひ也」と云畢るをも待はず渠はツト立上り「去ば予はイザ射出」と表を指て走出る此時敵は既に間近く押寄。口々に変物を渡せ。怪物を出せと罵りぬ。……己も今は安閑と智生の帰るを待ては居れず。余虫か止て呉るは大変嬉しけれど。ハイと云ては抜が合す思ひ切て駆出した：敵軍に取り囲まれた城主よろしく痴魄は悲壯の英雄を氣取つたりもするが、それも束の間、勝負は舌戦に持ち込まれるのであつた。「先鋒の将だけは先勝利の氣味」で、痴魄の論敵は怒氏と決まつて、「敵の扣たる所と。大休憩所との中央に。大卓子一個」を据えて戦場の備えも整つた。

斯為す内に敵軍よりは。既に怒生を始め他の諸将勇氣凜々として出来れり：己も一生懸命諸子に先立て進つ……双方目的の卓子に近づき：己は急度敵方を見渡すに：アナ恐ろしの怒生の顔色や。其傍に筆を操て薄氣味悪く沈着て扣へたは才生。平氣な面で優然たるは衆生に違なし。華奢に裝飾たるに似ず物思しげなるは情生とぞ知れたり。唯愛生独は見えず：

「急度」敵を睨み付けようとする、視界に入つて来るのは「恐ろしの怒生の顔色」、これだけで優に喜劇の一場面である。右にまた直ぐ続いて、以下の舌戦。

怒生は突進み来りイキナリ己を確と白眼付「痴氏とは汝か」と問れ痴「然り痴魄也」怒「汝は一体何為に此所へ出掛て来たか」痴「茲とは」怒「訳らぬ奴だ此仙境へ」痴「汝は亦造物主ジミた事を云者哉造々化々の機密

吾虫の預り知る所ならんや」怒「コ、ナ横着者め。造物主を後楯に為様とは卑怯千萬だ：汝は人間世界で通用せず茲へ逃込で来たのだ。汝は口賢しげに天理だとか。道徳だとか益にも立ぬ物を。此仙境へ担込で店を出さふとは呆れる程押の強い奴だ。(中略)汝が古郷でも学問を応用して実利実益を興す者は十中一二しかない。過半は宝の持腐に為して仕舞のは未しも結構だが。中には学問を他を馬鹿す手曲にしているのが在。汝は其手曲師の道具運びにも成ぬ奴だ能積て見ろ吾々の躰が人間程に成て。此細小な躰にある割合に智恵迄大きくなつたらは。布哇位な小サな島は根抜にして蒸氣船に造る位は朝飯前の仕事だ。ハアイもない事だ痴「エー何を云汝の落話を聞に出たのではない。そんな空砲で勝負が付か。今の世は有形無形の競争。皆理の戦だ。今腕力を避て汝と舌戦為も。此理屈に因て雌雄を決せんとするのたぞ」

最初は素つとぼけてでもいるかのような痴魄だが、そして、怒氏の学問論にも一理有るようでもあるが、痴魄の対応は意外にも肚が座っている。だが、怒氏の「放言たり能も云たり。(中略)余斗な事で苦痛をさせるも罪造だ。先軽く一本参つて呉ふ。」と投げかけられた「先汝が如き傀儡の捧も。此供給に依て活動する空氣の性質其加減が。地上と此仙境と何位違ふぞ。亦此空氣の加減が人虫無形の或大仕事に。影響するは如何なる真理の存する在て之をなすか。」という、それ自体何の意味が有るのか判然しない質問に対しては、さすがの痴魄も返答するに窮したものの如く、以下のように今回は終わる。

是実にたはひもない理屈だ。サア荅へよ速云すや」と怒鳴付られ荅んとして行詰り忽ち顔は赤く亦青く：悚々渠の顔を覗けばアハヤ啖ひ付んず口物凄く「エーコ、ナ極蕩者めが」と一吐の炎に撲れアット一声吾と吾が魂を呼戻したる衾の底

以上、本作を総覧するに、形式的には、古典的な夢物語の枠を借りたもので、中身は、全体に滑稽味の優った（いい意味で）馬鹿馬鹿しい戯作物であると同時に、明治二十三年国会開設を当て込んだ政治小説の一変種バリエーションであると認められる。

表記に関して言えば、未だ文章表現上の各種符号の類や地の文と引用文の境目の表記の仕方など、今日から見ると曖昧で過渡期的であるとの印象は否めないが、さまざまに使い分けられた漢字の当て様、多くの熟語に付された極めて独特な振り仮名の有り様など、単に時代の未成熟と言つて切り捨て難い、傑れて創造性に富むものと認めるべき点が多く存する。漢字と仮名の併用を主とする日本語の表記・文学表現の、本作におけるが如き生き生きとした、自由でなんら型に嵌らない動態を示す様は、その後の近代日本文学作品に殆ど喪われて行つたものであり、日本語の表記・文学表現の多様性と可能性を今日我々に省みさせるに十分な面白味を有するものとも考えられるのである。

他方、本作は、メディア・コミュニケーションの観点から見ても興味深いものがあるので、地の文の随所に嵌込まれる演説、新聞・雑誌の政論や雑報、天皇ならぬ蟻王の言葉、議案文、書簡、噂々々実にさまざまな形で情報がやり取りされる趣向に、明治という時代の雰囲気や巧みに盛り込まんとする作者の工夫を認めてよいと思われる。

そして、何よりも本作は、主人公の痴癡本人の自覚が絶無、すなわち全く身に覚えの無いのにも拘らず、知らぬ間に人間世界から神（？）によつて蟻の世界へと生まれ変わらされ、尊く偉い救世主的存在として周囲に祭り

上げられることになっていくという運命の不条理の劇であり、また、自己認識と他者による認識との極端にして強烈なズレのもたらす喜劇なのであって、自分を馬鹿だと正直に観念している者が、自らを好意的に迎え篤く信奉する周囲の者達（仲間でもあり信者でもあり）の中で果たして一体どのように我と我が身を処して行くのであるか、リアルに可笑しい秀抜なナンセンス心理劇として読み味わうことが十二分に可能な小説作品であるのだ。

尚、本書の奥附頁には、同一作者「笹の家すゝめ」著に成る二冊の広告が載っている。次のようなものである。

○にせ物語 全一冊

是は彼みやひ女の物したるふることを今様の小説体につゞりて古き米国てふりをうつせしものなり

○変窟蟻の世界 第二号よみきり

第二号窺窺たる淑女心裏潜然として敢て泣ぎ意中の人と袂別して身を犠牲に供し政海の怒濤を鎮めんとするを骨髄とす以上近日出版

後者は、本作の続編として、ヒロインの女子大いに活躍する政治小説の興味をそそって止まないものが有るが、あいにく第一号の本作との連繋の具合が定かでない。よくある事ながら、二冊共に予告のみで実際には出版されなかつたようである。

(付記) 本稿は、平成十五年度から平成十七年度にかけての科学研究費補助金の基盤研究(C)(2)15530404「インター

ネット社会におけるスキャンダル——メディアと共鳴する対人コミュニケーション——」(代表者：川上善郎)

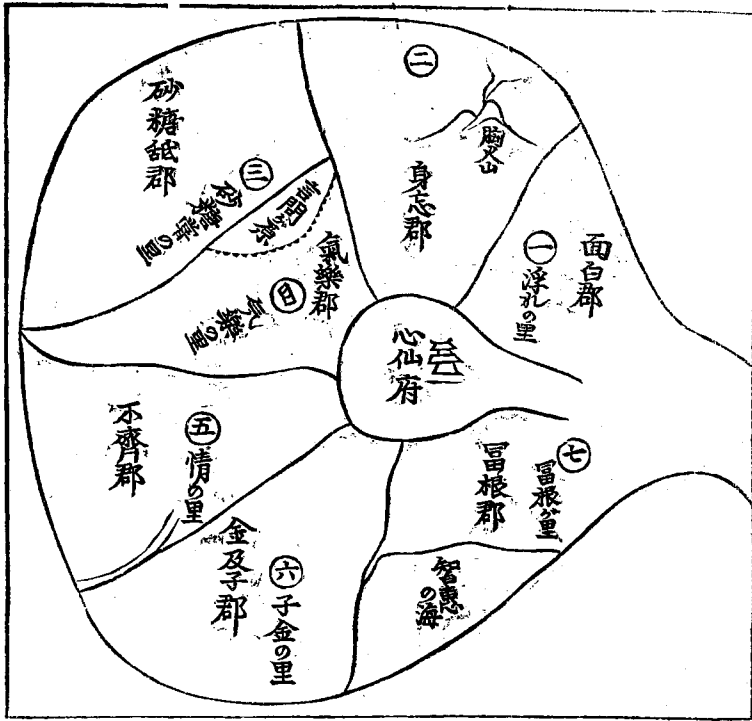
の成果の一部である。



図1 表紙



図2 口絵(表)



忠生	重臣	目幸の翁	陰士
以上學生			
德生	信生	才生	
以上各郡首			
愛生	智生		
怒生	痴生	情生	
喜生	樂生	哀生	
○ 虫名錄			

図3 口絵(裏)

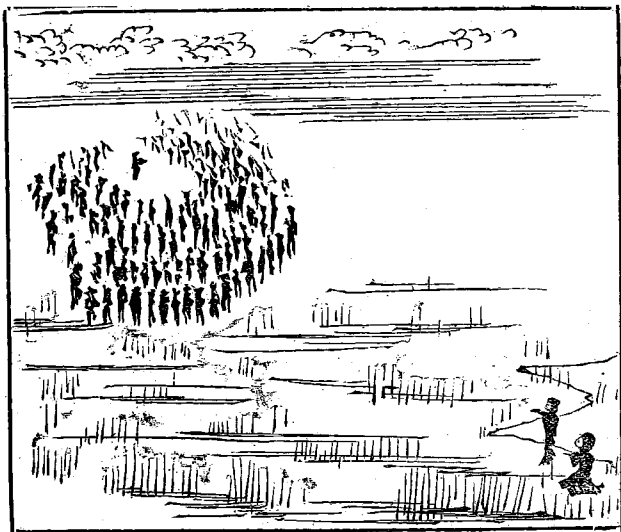


図4 喜生演説の図



図5 哀生宅参集の図

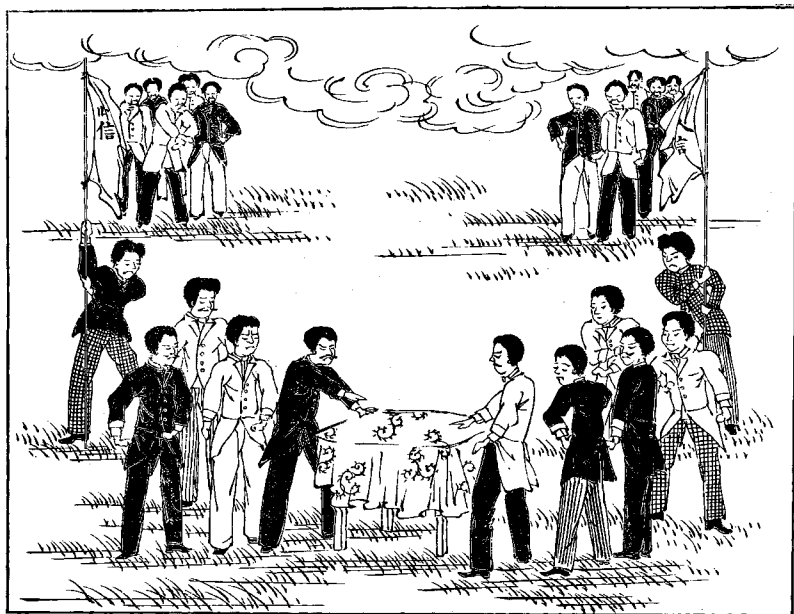


図6 大休憩所 舌戦の図